

時代物の名人で、温厚篤實、細心周到の性、自敘傳三十冊を残してゐる。當時の風俗、行事、時事の巷説、山水の景勝、旅行記事が趣味的に記されてゐて、自筆の挿畫や、高山植木の標本などを貼付してある。四代長門の淨瑠璃大系圖と對比して、これは隨筆的な興味に於て勝れてゐる。

器用な性だつたので、小細工物が巧みで、蟲履さきから貰つた金封や品書の目錄を、贈り主の名と共に切り抜いて、床本ほどの白紙の帖に貼りつけたのを保存してあつた。その帖末に金の總計が上つてあつて、これが三年目毎に一冊宛出来る、生涯の物は勿論數冊になつてゐる。永久に冥加を感謝する意から、これを作つたのださうだ。

七 山僧 三光齋

高野から轉向した

詳細はわからないが、高野の山から下りて來て太夫になつたのは事實。始め京都に出て素人淨瑠璃仲間て延玉と稱してゐた。大阪での初舞臺は文久三年三月、道頓堀若太夫の芝居で「猿曳門出諷」の堀川の段を語つた。體格が巨大で頗る美音、猿廻しは特に好評。二代目豊竹麓太

夫の門下だつた。

床に上る前にグツと一息に二三合ひつかけて出るといふほどの大酒家。そのくせ、見臺に向つた以上は、扇を斜に構へて、身動きもしない、まことに行儀のいゝ語りぶりて、朗々たる美聲を搖り出して少しも動かず、ちつとも疲勞をするといふことがなかつた。

若太夫の芝居で太十を語つた時、その大落しの聲が道頓堀を越して川向まで聞えたといふことである。

以上は主として異色の人を紹介したが、他にまだまだ名匠名星は群を爲してゐて、

四代目竹本綱太夫。江戸堀に住む、江戸堀の綱太夫、俳號四綱軒、美音家だが後に悪聲となる、併し名人、江州八日市の産、安政二年歿。

五代目豊竹若太夫。湯屋の三助から出たところ春太夫と同じ、始め黒治といふ素人。竹田の芝居の櫓下となつた人。紀州生れ、晩年京住。

五代目豊竹湊太夫。音羽湊と稱して、長門直傳世話語りの名人。染太夫死後文樂座の櫓下となる。播州明石生れ、明治十年七十八歳、北堀江自宅で歿。

七代目竹本咲太夫。世話語りの名人、三代目巴太夫の養子。明治三年、夏祭の三婦内を勤

めて歿、六十一歳。

三代目豊竹巴太夫。素人出身、是長で鳴らす、萬延元年彦山毛谷村を最後に引退、時代物が得意。

五代目豊竹駒太夫。素人出身、三國と稱した、駒太夫を襲ぐだけに、優れた美聲。

竹本越前大掾。初代津太夫、五代染太夫のこと、阿波津田村の出身、大物語り、嘉永二年大掾を受領し六十四歳、安政二年に死す。

初代竹本大隅太夫。大和長谷の生れ、時代物語り、三都を始め諸國各地を巡ること夥多し、元治元年六十八歳京都で歿。

六代目竹本内匠太夫。俗に袋安、大阪の人、悪聲の名匠、沼津が十八番、斯道の皮肉屋、安政三年死去。

三代目竹本津賀太夫。素人出身、さのと稱す、京で生れ大阪で修行、京嘉太夫座の櫓下となる。明治六年歿。

などを數へることが出来るが、次は變り種の大關株。